

ホットケーキは半 / 分に
CUT THE PANCAKE IN HALF
Written by MasakiTSU

津雅樹



[A KAGEFUMI SCIENCE FICTION SERIES]

ホットケーキは半分に

津 雅樹

Cut the pancake in half

by

Masaki TSU 2018

cover design and art direction

by

Matthew A. KEITH
(t. m. production)

He had a fixed conviction that at least one of them must lead into summer weather.

Robert A. Heinlein, *The Door into Summer*, 1957

彼は、その人間用のドアの、少なくともどれか一つが、夏に通じているという固い信念を持っていたのである。

ロバート・A・ハインライン『夏への扉』 福島正美訳、早川書房、1979

「半分、こしようか」

そう言って中条茉莉はわたしに微笑むと、先に店員がテーブルに置いていたプラスチックのケースから銀色のフォークとナイフを手を取った。

わたしが小さく「うん」とうなずくと、茉莉は目の前に置かれた皿の上にある、きれいな三枚重ねのホットケーキに狙いを定めた。一瞬の逡巡ののち、彼女がフォークの先をホットケーキの表面に添え、次いでナイフをゆつくりとふちに押し当てる。

慎重に、じつくりと、まるで幼い頃から大切にしていたぬいぐるみを慈しむような慎重さで茉莉はナイフを動かし、ホットケーキはその動きに合わせてやわらかく弾んだ。すると、ほかほかと温かい生地に染み込んだバターとメープルシロップの甘い香りが、適度な涼

しさに調整された店内の冷房によって生まれた空気の流れに乗って、わたしの鼻腔をくすぐった。

わたしはホットケーキを半分に切り分けている茉莉のゆっくりと優雅な姿を眺めながら、メロンソーダをひと口飲んだ。グラスを染めるグリーンのようにクツキリとした炭酸の刺激が、喉を流れ落ちる。

茉莉が連れてきてくれた大学近くの喫茶店は、学生街特有の喧騒とも、梅雨どきの蒸し暑さとも無縁で、ちよつとしたホテルのラウンジのようだ。彩度を落としたりモノトーン内装と照明のなかに聞こえるほのかなスムーズ・ジャズの音色が、落ち着いた雰囲気を作り出している。

わたしはシャツの裾を直しながら、窓の外に目をやった。通りに面したテーブルから見える空は、ここのところでは珍しく晴れ渡っていた。その一面の青空をにぎやかに流れる雲の群が、やがて来たる夏の輝きを予感させた。

「お待たせ」

茉莉の声のほうに向き直ると、彼女は丹念に切り分けたばかりのホットケーキの片割れを器用に取り皿に移している最中だった。茉莉は取り皿に移したほうを自分のものに寄せ、もともとの皿に乗ったほうをわたしにくれた。

「ありがとう」

わたしが、茉莉の切り分けたホットケーキに目を落とすと、それは素敵に半円だった。そのことが驚きを伴った嬉しさをわたしのなかに芽生えさせ、神経伝達物質がそれを表情筋に伝えたに違いない。わたしが視線をホットケーキから茉莉に戻したとき、彼女は整った白い歯をちよつとだけのぞかせて、はにかんだ。

中条茉莉とわたしが最初に出会った——というか、さかのぼ遡ってそれが彼女であったと認識した——のは、まだ一回生の春のことだった。

わたしが大学に入学したての春、キャンパス内を縦断する目抜き通りに植えられた桜の木々には花が咲き誇り、新入生たちを学び舎に迎え入れていた。アーチのように視界の上半分を覆う桜並木の光景を仰ぎ見ながら、多くの学生がそうであるように、わたしもまた人生初のひとり暮らしをスタートさせてそわそわと浮き足立っていた。

故郷は遠く、引越しもいままで一度もしたことがなかった。小学校に上がってからの十二年間をセーラー服で過ごしてきた身としては、洋服屋に言われるがままに新調したスーツで入学式に出ることも、これからの毎日を——講義も含めて——私服で過ごすこともなんだか落ち着かない、というよりも、まだまだ現実味がなかった。

午前中に開かれた入学式のあと、眠気ばかりと無闇に戦う羽目になった午後の入学オリエ

ンテーションから解放されたわたしは、その晩、「履修の手引き」をもとに、おっかなびつくり受講する授業を選び出し、必要と思しき教科書をリストアップした。

あくる日、わたしは敷地の最奥にある大学生協の書籍コーナーに立ち、同じように教科書の類を求める学生たちに混じって、ジャンルわけされた書棚に押し込められた雑種多様な背表紙の群れを左から右に眺めていた。

慣れていないのか、それとも掛けている眼鏡が汚れているのか、目当ての本がなかなか見つからないことに苛立ちにも似た落胆を覚えて、わたしはため息混じりに肩を落とした。

そんなとき、わたしからちよつとだけ離れたコーナーにすつと立って、しなやかな指先で颯爽とハードカバーの白い書籍を取り出したのが、中条茉莉だった。

すらりとした長身に青いシンプルなつくりのワンピースをまとい、白い肩下げかばんとコントラストを織り成していた。思わず眺めた横顔は鼻筋がとおって美しく、ふわりと流れるセミ・ロングの黒髪からのぞく淡い肌の色は、彼女が混血であろうことを思わせた。

彼女は手に取ったハードカバーの表紙に目を落とすと、迷いのない動作で表紙をめくった。目次を確認するように数頁めくると、続いて奥付を確認するためであろうか、いちばん後ろのほうの頁を開いて、今度は後ろから何枚かの頁をサラサラとめくった。彼女は求めていた情報が手に入ったことを確認するかのよう、小さく二度三度うなずくと、今度は真ん中

たりを開き、文面を読むでもなく前後に頁をめくった。すると茉莉は手に持ったハードカバーを急に目の高さまで持ち上げたかと思うと、彼女はそのままそれを水平に傾けて、本の側面——地をじつと眺めはじめた。

無意識に彼女の動作に見とれていたわたしは首を傾げた。

いったい彼女はなにをしているのだろう——そんなわたしの疑念に満ちた視線もつゆ知らず、茉莉は満足げに目を細めると、ハードカバーをもとあつた書棚に戻した。そして、足取り軽くアトランダム——少なくとも、わたしにはそう見えた——に位置を変えては同じ動作を繰り返した。その動きは、どこか神秘的ですらあつた。やがて彼女は、一冊の書籍を棚から選び取ると、それを手にレジのほうへと去った。

わたしはポカんと、彼女の残した動きの残り香をしばらくのあいだ眺めるままだった。

わたしが彼女をふたたび見かけたのは、翌々日、午後の講義だった。

全学部全学年の誰でもが受講できる一般教養の授業とはいえ、一般生活からは馴染みの薄い哲学や現代思想全般を俯瞰する「言語文化入門講義Ⅰ」だったためか、五つのパイプ椅子に白い長机一卓がセットでずらりと並んだ講義室に、学生の姿はまばらだった。

その日の講義は初回であり、どちらかといえばガイダンスに重きを置いたものだったから、講義内容にあまり踏み込むわけではなかったものの、どこか京都弁訛りのある教授の口から

語られる聞きなれないタームの数々は、わたしにはチンプンカンプンだ。配られた資料レジメも見
たことのない単語でいっぱい、およそ日本語とも思えないほどだった。半分ほど時間が過
ぎたところで、今後この講義を受講し続ける——いや、続けられる——のかどうか、心のな
かで逡巡していた。

時間よりもすこし早く講義は終了し、ざわめきを取り戻した講義室のなかに茉莉の姿が
あった。彼女は、わたしの座った場所から四列前の通路側の席に座っていた。それに気がつ
いたわたしは、なんとはなしに彼女の後ろ姿を眺めながら帰り支度し、そのほかの学生たち
に混じって講義室を出ようと、席を立った。

そのとき茉莉は、先ほどまで使っていたのであるう大学ノートに向かって、わたしが生協
の書籍コーナーで見かけたのと同じ動作をした。ノートの真ん中あたりを見極めるように開
いて、目の高さまで持ち上げる。あまりにその動作が自然なので、誰も見咎めなかった。

ノートの側面を素早く見定めている茉莉のそばを通り過ぎようとしたとき、彼女は満足し
たように開いたノートにしおりを置いて、静かに閉じた。そのとき垣間見えたノートの紙面
は、たしかに白紙だった。

その白さが、わたしの目に焼きついた。

翌週の同じ時間、同じ講義、同じ講義室、同じ席に、中条茉莉の姿はあった。

わたしは、茉莉の座った席のひと列後ろに座り、講義を聞きながら、彼女の挙動をちらちらと観察した。彼女は授業のあいだ、活発に質問したり、教授の投げかける問いに答えたりすることもなかったが、私語をするでもなく、スマホをこっそりいじるでもなく、居眠りをするでもなく、背筋をしゃんと伸ばし、教授の言葉や板書を注視し、資料をめくった。

そして、茉莉はやはり講義終了後に、まるでなにかの儀式かのように書籍やノートを開いて頁を調整しては、その地を見つめていた。名前も声も知らぬ彼女の秘密めいたその動作に、わたしは彼女が講義室を出るまで目を離せなかった。それについて尋ねようという考えすら浮かばなかった。茉莉が流れる髪とスカートを揺らして講義室から出たあとの空間を眺めながら、次こそは彼女に声をかけよう、と心に決めた。

さらに翌週の「言語文化入門講義Ⅰ」の講義室に入ると、中条茉莉は、やはり前回と同じ席に座っていた。わたしよりも早く講義室に着いていたらしく、すでに席について先週配られた資料を静かに眺めていた。

わたしは、茉莉の謎に近づきたい一心で、彼女が座った席からひとつ間を置いた、同じ長机の席に座ろうと思った。茉莉の左側にあつた椅子の背もたれを引いたとき、その音に気づいた茉莉がこちらを見上げてきた。

ふと、お互いの目が合う。彼女の瞳が、わたしの目を捉える。どこか別次元に吸い込まれ

そうな、奥深く純度の高い輝き。その一瞬は、永遠にも感じられた。

茉莉はほんのすこしだけ微笑をこちらに寄せ、小さく会釈をすると、また資料へと目を落とした。

やがて講義室に入ってきた教授のひと声によって講義は開始された。しかしわたしは、ひと席挟んで隣に座る茉莉の、ほんの一瞬見つめた瞳と、なによりも、わたしの心を捉えて放さない彼女の動作の不思議さに魅かれるばかりで、講義の内容はちつとも頭に入ってこなかった。教授はランガージュがどうのとか喋っていたようだが、シニフィエとシニフィアンが、いったいどっちがどっちでどっちがどっちなのかさえ、わからなかった。茉莉や、まわりの学生たちが資料をめくる音やノートにメモを取る音が、はるか遠くに聞こえた。

「なら——」と、教授は腕時計に目をやりながら言った。「ちよつと早いけど、キリがいいので、きょうはここまで」

その言葉にとっさに講義室のホワイトボードそばに設置された壁掛け時計を見ると、たしかに十分ほど時間は余っていた。教授は、そそくさと荷物をまとめて退散し、にわかになぞめきだった学生たちも三々五々、席から立ち上がっては講義室をあとしてゆく。そのうち講義室は、茉莉とわたしが残るばかりになった。

そんななかわたしは、自分の持ち物をかばんにつめながら、ちらちらと右に座る茉莉のほ

うを見やった。茉莉がアクションを起こしたら、きょうこそはそれについて彼女に尋ねるのだ。

茉莉はきょうの講義内容を反芻するように小さくひとりうなずきながら、資料をペラリペラリとめくり、「ふっ」と鼻で息をつきながら天井を一瞬見上げた。そして、机の上に開かれたノートをいったん閉じ、まだ使われていないノートの頁をめくった。そして、なんの違和感もないためらかな動きで、目の前までサッと持ち上げた。

そのあいだ、わたしは茉莉が満足してその儀式を終えるまで、じっと息を殺し、気配を消そうとした。茉莉はじっとノートの側面を見つめ、いつものようにノートを閉じ、そっと机の上に戻した。

いまだ、と思ったわたしは、短く息を吸って、茉莉のほうへ身体を向けた。

「あの！」

知らず知らずのうちに力んでいたのだろうか、思いがけず大きな声になってしまった。茉莉が驚いた顔を身体ごと、こちらに向けた。椅子がガタリと音を立てた。

「それ——」ふたたび重なった視線に、言葉が詰まりそうになるが、わたしはなんとか肺から息を搾り出した。「いつも、ノートや本を開いては地、を見てますよね。講義の終わりや、生協の書籍コーナーでも見かけました……それ、なんですか？」

言いながら、言葉も交わしたこともない相手になんと藪やぶから棒な声のかけ方か、と後悔と動揺がない交ぜになって身体を硬直させた。できることなら、このまま泡をふいてぶっ倒れてしまいたかった。

よもや自分が声をかけられるとは思っていなかったというふうに目を見開いて、長い眉を奇妙に互い違いしたまま固まっていた茉莉は、ややあつて大きな目を二度三度しばたかせた。そして、「あー……」と声をもらしながら茉莉はわたしから目をそらすと、視線をあさつての方向にやった。

「見られてたのかあ……」

茉莉は人差し指で頬を掻きながら、「まいったなあ」と恥ずかしそうに小首を傾げた。

「ごめんなさい、急にこんなことを聞いて」

そんな彼女を見て、わたしはハタと正気を取り戻し、慌てて頭を下げた。

「失礼でしたよね」わたしだって、見ず知らずの人間がきわめて個人的なものかもしれない領域に土足で踏み込むべきではないことは、わかっていたのだ。わかっただけけれど……。「でも、どうしても気になって……」

わたしは頭を下げたまま、モジモジと小声になった。自分でも、どうして茉莉のことがこ
うも気にかかるか、こども猪突猛進してしまったのか、わからなかった。

「その……」茉莉の声に顔を上げると、彼女は短く言った。「好きなの」

どういうわけか、その目的語が自分のように思われて勝手に内心で動転していると、彼女は首をすくめて言った。

「半分が」

「えっ？」

「だから探しているの」

茉莉の意図するところが皆目かいもくつかめず、わたしがいよいよ目を白黒させていると、彼女はニコリと笑った。

「気づかれたのは、あなたで三人目」

「そう……なんですか？」

「ええ。おとといは兎、きのうは鹿、きょうはあなた」彼女はそんな不思議なことを言うと、微笑みながらスツと右手をわたしに差し出した。「中条茉莉です」

わたしは、自分もまた名乗っていなかったことをいまさらながらに思い出して慌てて握手を返した。

「清水未央みづみです」

「よろしく」

握られた茉莉の手は、素敵にあたたかかった。自分の手も、こんなにやわらかであったらよかったのに。

「ところで——」茉莉は手をそつと離すと、急に真顔になった。「清水さんも新入生ですか？」

「え？」彼女の手の感触が、ちよつぴり名残惜しかった。「ええ」

わたしが首肯すると、茉莉の表情がパツと明るくなった。

「よかった！ わたしも一回生なんだ。質問をされたついでに、わたしもあなたにひとつ尋ねたいことがあるのだけど」

そう言うと茉莉は、周囲を気にするように左右をチラリと見やると、わたしに近づくように手招いた。そのジェスチャーから、よほど茉莉に重要なことを聞かれるに違いないと思つたわたしは、椅子をすこし引きずつて彼女に近づいた。

「あのね……」

茉莉は身体を前のめりにして、わたしの耳もとに手をかざした。わたしは彼女の質問にあやまず答えられるように、耳をそばだてた。茉莉は、囁くように声をすぼめた。

「新入生の女子の検便、提出日はきょうまでだつて」

「ふあえつ」

予想だにできなかった茉莉の問いに、思わずヘンテコが声を出してしまった。身を引いて茉莉を見ると、彼女の表情は真剣そのものだった。いまここで、可及的速やかにその問いの答えを知りたいのだと、彼女の瞳は主張していた。

たしかに女子の新入生は、健康診断の一環としておこなわれる検便を、きょう中に保健管理センターに提出することになっていた。

わたしはあたふたと、そうだ、と答えた。

茉莉は求めていた情報が得られると、机のものを即座にかばんにしまいこむと、椅子から勢いよく立ち上がった。

「ありがとう」

彼女は短くわたしに一礼すると、きびすを返して講義室の出口に向かった。あっけにとられてみると、彼女はこちらを振り向きながら右手をあげた。

「またね、清水未央さん」

「う、うん」

わたしが弱々しく手を振り返すと、彼女は颯爽と歩き去った。

奇天烈なひとだなあ、とわたしはため息をついた。当初の疑問など、そのときには、どこかへ消え去っていた。

それからというもの、中条茉莉とわたしは、大学に入ってからのはじめての親しい友だちになった。

翌日、ちょっとした出会った学食で昼食を共にした折りに互いの一週間のスケジュールをつき合わせてみたところ、コースは違うものの学部が同じこともあって、「言語文化入門講義Ⅰ」以外にも受講がかぶっている講義がいくつもあったのだ。

あらためて茉莉と話してみれば、彼女がわたしの抱いた不可思議な第一印象とはずいぶん異なる人物であることがわかってくる。

どちらかといえば茉莉は物静かなタイプ。聞き上手であり、わたしが相談や疑問を投げかければ、やわらかく目を細めながら応えてくれたし、反対に茉莉が口を開けば、わたしの知的好奇心を十二分に満たしてくれるほどに博識だった。

講義の内容に対する理解もそうなら、わたしが大の苦手とする数学や理系の知識、文学や芸術から娯楽、政治から社会まで幅広い。どういうわけだか麻雀が得意で、マイジャヤン「中」アガリをよく使う。身に着ける衣服や、料理の手ほどきも的確にしてくれる。すこぶる論理的にものごとを考え、それでいて倫理観にあつく、人——それから大学敷地内に住み着いた野良猫——に優しくふるまった。

こんな具合に、茉莉はわたしの知る限りの同世代のなかでもっとも理知的で聡明だった。

頭の回転が早く、たまにレポートや諸々の提出日を件のように下忘れしてしまう以外は、なにごとにも器用で手際がよい。

その一方で、やはり彼女が持つこだわりは、並々ならぬものがあるのも相違なかった。

「好きなの。半分か」

茉莉が自身でそう宣言したとおり、彼女は各々の講義のたびにノートやテキストを半分に開いては眺めたし、図書館や近所の書店で本の半分を探して回った。廊下や歩道を歩くときは、端よりも真ん中を好んだ。おやつには、ビスケットやクラッカー、せんべいの類を割って食べた。

一緒に映画に出かけたときは、左右の半分になるような座席を自動券売機の画面から必死に割り出そうとしていたし、上映中にときおり腕時計を眺めていたのは——決してリバイバル上映だったタルコフスキーの映画『ストーカー』がつまらなかつたわけではなく——おそらく上映時間の半分を探そうとしていたのだろう。通り過ぎる公園に設置された長椅子や、喫茶店のテーブル、雑貨屋のショーケースなども、目で追っては測定しているらしい。

とはいえ、実際にそこに座るかどうかといったことには関心がないようで、目的はあくまで「半分」を探すことにもっぱら興味があるのだった。ふいに橋や歩道橋、横断歩道のなかほどで立ち止まることもあったけれど、そんなときは「つい」と苦笑いを浮かるのが常だった。

そんな茉莉の一連の行動は、もはや無意識的な習性のように思われた。つかみどころがなく、ヘンテコで、奇妙ではあるが、ナチュラルなのだ。

茉莉は満足のゆく半分に出会うと、わたしに愛らしい片えくぼの笑顔を向けた。

わたしはそんな茉莉を興味深く見つめた。

そして彼女は、ひとりじめの腕のなかで、わたしを見つめ返してくれた。

彼女と一緒にいると、とても居心地がよい。まるでなにかに吸い込まれるかのように、波長がピッタリと合致する感じがした。

だが、茉莉とのつきあいが深まれば深まるほど、彼女が秘めた謎もまた深まった。

——なぜ、半分なのか？

茉莉はその理由を言おうとはしなかったし、わたしも敢えて問おうとはしなかった。なにが彼女の無意識をそこまで突き動かすのかわからなかったし、知ろうとも思わなかった。それはもはや茉莉とわたしにとっての日常となっていたし、彼女のそばにいらればそんなことは、どうだってよいのだ。

否——違う、そうではない。そうではなく、知ってはならないような気がした。

——なぜ、半分なのか？

新緑の季節はやがて重い雨雲に薄暗く塗りたくられ、わたしたちは同じ傘の下に逃れた。

傘が降りしきる雨粒を弾くように輝いた夏はまるで時間を競うように過ぎ去り、すぐに落ち葉がモザイク画のようにあたり一面を彩った。近づく冬を分かちあつて、わたしたちは身を寄せ、笑いあつた。雪で真っ白に埋もれた誰もいない真夜中に町に繰り出して、ふたりで車道に足跡を残した。

——なぜ……いや、そんなことはどうでもよい。なにせ、いまは茉莉が隣にいるのだから。茉莉との、永遠とも思えた一年が巡り、ふたたび春が訪れた。

「早いものだねえ」

やわらかな春風に髪をなびかせながら、中条茉莉はつぶやいた。

「うん」わたしたちは、かつてのわたしたちのように学内をソワソワと歩く新生たちの姿を見やった。「そうだね」

ひらひらと、桜の花びらがあたりに紙吹雪のように舞い散っていた。

「桜の見ごろも、もう終わりか」

茉莉は大学の目抜き通りに並んだ桜並木を眺めた。今年は去年と比べて、桜前線が到来するのが随分と早かったために、もう枝に残っている花のほうが少ないのだった。

茉莉の表情は、なにかを探しているかのように見えた。

遠くでもなく、近くでもなく、茉莉の瞳はあてどなく揺らめいた。

わたしは、彼女の探しものがなんなのか、おそらく抽象的にわかっていた。でも具体的に
は言い当てられない。

最近、それがふいに不安に感じられることがあった。

「茉莉、どうしたの？ なにか探しもの？」

彼女はわたしの問いには答えず、かわりに笑顔を寄越した。

「さ、未央。急ごう」茉莉は首を校舎のひとつに向けて振った。「講義に遅れるよ」

わたしはうなずいて、舗道の真ん中をズンズン進む茉莉のあとについて歩いた。

頬を撫でるように吹いていた春風に、いつのまにか雨のにおいが混じっていた。

「ねえ、未央。今度、行ってみたい喫茶店があるんだけど」

茉莉がわたしにそう声を掛けてきたのは、梅雨入りしてしばらくたった六月も下旬だった。
うっかり傘を忘れたわたしは、大学図書館の入り口の屋根の下で雨宿りをしていた。

「いいよ。どんなところ？」

「最近、大学の近くにできたらしいの」茉莉はかばんのなかから葉書大の紙を取り出した。「き
のう、アパートの郵便受けにチラシが入ってた」

受け取って紙面を見ると、モノクロを基調としたデザインで、店名は英字で「ハーフトー
ン」とあった。喫茶店というよりも印刷屋みたいな名前だが、いかにも茉莉の興味を引きそ

うな店だ。

「ホットケーキが、おいしいらしいよ」

「いつ出かけようか？」わたしはチラシを彼女に返しつつ尋ねた。

「次の水曜日の午後はどう？」

水曜日の午後なら互いに講義もなかったし、わたしもその週のアルバイトなどは別の日だったし、とくに予定は入っていなかった。

「水曜日ね、わかった」

そうして向かいに座っている茉莉は、自分がきれいな半円に切り分けたホットケーキにわたしが手をつけるのを、いまかいまかと、頬杖をして待っていた。

「わたしは毒味役ってわけ？」

「ふふ」茉莉は悪戯っぽく目を細めた。「バレた？」

互いのジョークに小さく笑いあったあと、わたしは手にフォークとナイフを持った。目の前のホットケーキがあまりに半円なので、それを崩してしまふのがなんだか惜しい気がした。そうはいつても、ほかほかのホットケーキが冷めてしまっても、それはそれでもったいない。わたしは、茉莉の切り分けたホットケーキの左端からひと口大に切り取って、口へと運んだ。やわらかく温かな生地が口のなかでとろけ、メープルシロップとバターの風味が舌の

上に広がった。

「おいしい？」茉莉の問いかけにわたしが首肯すると、彼女もホットケーキを口に運んだ。「うん、おいしい」

わたしたちはしばしのあいだ、会話もなくホットケーキを味わった。

わたしが四口目を切り取ろうと皿に目を落としたとき、ふと、ホットケーキが目に入った。茉莉が美しく半円に切り分けたホットケーキは、わたしのぶきつちよな手さばきによって、いびつな形に変容していた。まるで、崩れかけた古代遺跡のようだ。そのホットケーキの断面をなんとはなしに眺めていると、こここのところ考えもしなかった問いが、ふと脳裏をよぎった。

——なぜ……？

咄嗟に茉莉のほうを見ると、彼女はおいしそうにホットケーキをばくついていた。

「ねえ」

と、わたしは彼女に声をかけた。

「なあに？」

茉莉はわたしを見上げた。まだすこしホットケーキが口のなかに残っているのか、頬がほんのり膨らんでいる。

「どうして……」途端、さざ波のように悪寒がわたしの背筋を震わせた。「半分なの？」

「へ？」茉莉は、きよとんとした表情を向けた。「ひとりだと大きいかな、と思って。ごめん、少なかった？」

「ううん、ホットケーキのことじゃなくって——」わたしは彼女から目をそらさず、首を小さく横に振った。「どうして茉莉はずっと……いつも半分を探しているの？」

「ああ……」

茉莉はやわらかく微笑んだ。なんでもない、といった表情だ。

彼女は一度目を伏せてフォークとナイフを置くと、自分が注文していたアイスコーヒーをストローでひと口飲んだ。氷の位置がコップのなかでズレる音が鳴った。

「うーん」茉莉は両肘を机に置くと、両手の指を組み、顎を乗せて上目がちにわたしを見つめた。「なーんでだ？」

わたしが答えられずにいると、茉莉は茶目っ気たっぷりといった表情で口を開いた。

「それはね——なんて言ったらいいのかな——そう、自分の正気を保つため、だよ」

「だって、茉莉は普通なもの」

「未央は——」茉莉はわたしに問うた。「半分って、なんだと思う？」

「えっ？」

「そう、半分」

わたしは、茉莉の急な問いかけに狼狽した。茉莉は先ほどの表情とは違って変わって、とても真摯な瞳でわたしをじっと見つめて、わたしが答えるのを待っているのだ。

「半分は——」口を開いて言いかけたところで、わたしの思考は混乱をきたした。「半分は、半分だよ。全体があつて、その中間。一に対して二分の一。五十パーセント」

「そう——」茉莉はうなずくと、ゆっくりと言葉を続けた。「半分は半分にほかならず、それを規定するためには、まず全体ないし総数を想定しなければならない。」

でもね、考えてみて。

仮に全体や総数を想定したとしても、それ自身が半分である可能性を否定できないし、もしも絶対的な全体が確定できたとして、それを半分にしたところで、今度はその半分それぞれが、ひとつの全体になるだけでしょう？ 半分なるものを規定しようとするなら、その観点は無限に拡大しながら俯瞰するか、あるいは思考を無限に細分化して沈下するか……：…：…どちらかを迫られ、そして、そうせざるを得ず、一点に留まることを許されない。どちらにせよ、言語それ自体を記述するメタ言語を人間は持ち得ないと誰かが言うように、半分は半分を探そうとした時点で、それを半分だと規定するためのメタ的な思考／観点を導入が必要だつてこと。でもそれは、どうしたつて現実ではあり得ない」

「……どういうこと？」

「つまるどころ——」茉莉は顎を両手から持ち上げると、身体を背もたれにあずけて今度は飄々とした口調で続けた。「半分なんて、ないんだよ。もっといえば、絶対の全体もね。わたしたちがいま食べているホットケーキだって、わたしたちがひと口目のナイフを入れたとき——いいえ、わたしが半分にしたときには、すでに半分ではなくなっているし、そもそも一個のホットケーキなるものも幻想なんだよ。そう思っていれば、自分は狂っていないと思える」

「わけがわからないわ」わたしは呆然とした。

「うん。わたしも、言っていて自分でわけがわからない」茉莉は、ニコリと笑った。「でもきくと、だから探してしまうんだ。本やノートの厚さに、道や橋の幅に、映画の尺に、つついね」茉莉のいつもの笑顔につられて、わたしも笑みがもれてしまう。

「それに多分——」彼女の笑顔と落ち着いた声音は、わたしに安心感を与えてくれる。「もうすこしなんだ」

「ヘンテコだよ」わたしは言った。

「半分くらい嫌いになった？」茉莉は片えくぼを浮かべて悪戯っぽく言った。「わたしのこと」「いいえ」わたしは首を横に振った。「そんなはずないよ」

「よかった」

わたしたちはお互いにクスリと笑いあった。

「さ、冷めないうちに食べちゃおう」茉莉は言った。「こんなにおいしいんだから」

「うん」

その後、わたしたちはホットケーキを平らげると、飲み物を飲みながら、しばらくのあいだおしゃべりをして過ごした。いつもどおりの、他愛のない会話だった。

店から出ると、夕闇がほんのりと空を染めはじめていた。通りを走る自動車も、ちらほらと微灯のヘッドライトが点いているのが見える。とはいえ、太陽の熱気を吸い込んだアスファルトにほだされて、空気はじんわりと蒸し暑いままだった。

「あーあ」茉莉は大きく背伸びをした。「おいしかったねえ」

「うん、とつても」わたしはうなずいた。「また来ようよ」

「今度は一個ずつ食べようか」

「でも、そしたら太っちゃうかも」

「それもまた一興さ」

茉莉は髪をはらうと、「それじゃ」と言った。ここからだ、お互いの住まいは反対方向なのだ。

「また、あしたね」

「うん。またね」

わたしがそう応えると、茉莉は片手を短く振ってから、歩き出した。

わたしは、すこしずつ遠ざかってゆく茉莉の背中を見送った。彼女の着た白いブラウスと青いスカートの取り合わせは、いま時分の路地に咲くアジサイを連想させた。そのとき、ふいにわたしのなかにこみ上げるものがあつた。いま彼女にこれだけは伝えておかなければと、なぜか思った。

「茉莉」

わたしは、数メートル向こうに歩き去つた茉莉を呼び止めた。彼女はくるりとこちらを向いた。

「大好きだよ」

通りを行き交う自動車の音で、彼女に自分の言葉が届いたのかどうかわからなかったが、茉莉は笑顔でわたしに大きく手を振った。

わたしも手を振り返した。

茉莉は踵を返して歩きはじめた。すこしずつ小さくなってゆく後姿は、やがて向こうの交差点を曲がって見えなくなった。

あくる日から、茉莉は忽然と姿を消した。

ふたりして受けていた午前中の講義に茉莉は来なかった。寝坊かとも思われたが、午後にも姿を現さなかった。

翌日も、同じだった。

その次の日も、彼女は現れなかった。共通の友だちや知人に尋ねても、皆一様に知らないと言う。

体調でも崩したのかと思いい、茉莉の携帯電話に連絡を試みたが、電話は不通、メールにも返信はなかった。

週があけても、茉莉の姿はないままだった。アパートのドアを叩いても、反応はなかった。

結局、梅雨があげ、月が変わり、大学での二回目の夏が訪れても、茉莉は現れなかった。咲いていた花が気づいたときには散っているように、ふと、ふいに、あっけなく、いつの間にか、茉莉もまたわたしの前から姿を消してしまったのだ。

茉莉がどこに行ったのか、ついにわからなかった。

彼女について、そうであったように。いや、わたしは本当に彼女のことを理解しようとしていたのだろうか。それすらも、わからない。

「それに多分——もうすこしなんだ」

最後に茉莉と会った喫茶店での、彼女の言葉が思い出される。さらりと聞き流してしまつた、あの言葉が。

なになが「もうすこし」だったのだろうか。

もしかしたら……と、わたしは思う。もしかしたら茉莉は、彼女が求めるものを探し当てたのかもしれないではないか、と。

この世を形づくるボメロオの輪を断ち切つて、その向こう側で。

その先で茉莉がなにを見たのか、わたしには想像もつかない。よしんば彼女と一緒にそれを眺めたとしても、わたしはわかつてあげられないだろう。

だが、わたしは信じている——否、信じていたい。きっと彼女は戻ってきて、わたしの心の半分にはっきりと穿^{うが}たれた穴を埋めてくれることを。

わたしもまた探し求めるだろう……茉莉を。

わたしの半身を。

